

大学生にレポートはつきものだ。一度もレポートを書かずに卒業する学生は、まずいないだろう。

私も、学生時代に何本かのレポートを書いた。当時は、手書きするしかなかった。大学にコピー機もなかったので、手元には残っていない。どんなレポートを書いたかも覚えていない。

学生時代に、レポートの書き方を教わったという記憶もない。図書館で本や資料を借りたりして、自己流に書いたりしたのだろう。そうやって、何とか仕上げていたのだと思う。

今は、授業で、レポートの書き方を教える大学も珍しくない。学生にとっては、大変よい時代になったものだ。

インターネットで検索すると、「レポートの書き方」の本は、百数十冊も出てくる。大学生全般を対象にしたものもある。特定の学問分野の学生向けのものもある。そうした本を読みながら、レポートを書く学生も大勢いることだろう。

本書は、そうした類書の一員に新たに加わるものである。目次を見てもらうとわかるように、3部構成になっている。第1部は、調べる。第2部は、考える。第3部は、書いて伝える、である。順々にたどれば、レポートは完成。もしそうであれば、こんな楽なことはない。レポートは、三段跳びではない。ホップ・ステップ・ジャンプとは行かないのである。調べる、考える、書いて伝える、の3つの段階。それらを行きつ戻りつ、進むことになる。そんなふうにして、レポートの中身が充実したものになっていくのだ。

レポートを書く動機はさまざまだと思う。どうせ書くならば、

嫌々ではなく、楽しく書きたい。そんなふうに行きたいものだ。本書には、そういう気持ちが込められている。

本書が対象としているのは、初めてレポートを書こうとしている人だ。課題を出されたものの、どこからどんなふうに取り組みばよいか見当もつかない。そんなふうにいる人には、是非読んでもらいたい。各章の最後には、ポイントがまとめられている。それに目を通してから本文を読んでもらうと、理解が深まると思う。

レポートを書いたことがあるが、どうも不満である。そんなふうにいる人にも、本書を薦めたい。3つの段階のどこかに不十分さがあるようだ。自分なりに、何となく感じている人は、気になるところから読んでもらえればいい。自分なりに納得がいく箇所があれば、参考にしてもらいたい。

書くという行為は、自分との対話である。伝えたいという自分の意図を自覚する。それを書き言葉として表現していく。どうやったら、周囲の人にわかってもらえるか。どうしたら、興味深く読んでもらえるか。そういうことを自問自答しながらレポートを書いていく。それが、とても大事なことなのである。そういうプロセスを経て、書くという行為は上達していく。

話し言葉は、録音しなければ、その場で消えていく。書き言葉は、文字として残っていく。「文は人なり」と言われる。どういう文章を書くかは、その人自身を表すのだ。

文章を書くということは、一生ついて回るものである。大学生活で培った書く力は、卒業後も大いに役に立つ。本書を参考にして、楽しみながらレポートを書いてもらいたい。それを通じて、書く力を身につけてほしい。本書を通じて、書くことの楽しさを感じる学生が増えていく。それは私にとって、何よりの喜びである。

○著者紹介

都 筑 学 (つづき まなぶ)

1951年 東京都生まれ

1975年 東京教育大学教育学部卒業

1977年 東京教育大学大学院教育学研究科修士課程修了

1981年 筑波大学大学院心理学研究科博士課程単位取得退学

1997年 博士（教育学）中央大学

現 職 中央大学文学部教授

専 門 発達心理学, 青少年の時間的展望の発達

主要著作

『高校生の進路選択と時間的展望——縦断的調査にもとづく検討』（ナカニシヤ出版, 2014年）

『今を生きる若者の人間的成長』（中央大学出版部, 2011年）

『中学校から高校への学校移行と時間的展望——縦断的調査にもとづく検討』（ナカニシヤ出版, 2009年）

『小学校から中学校への学校移行と時間的展望——縦断的調査にもとづく検討』（ナカニシヤ出版, 2008年）

『大学生の進路選択と時間的展望——縦断的調査にもとづく検討』（ナカニシヤ出版, 2007年）

『心理学論文の書き方——おいしい論文のレシピ』（有斐閣, 2006年）

『あたたかな気持ちのあるところ——いま, 希望について』（PHP研究所, 2006年）

『希望の心理学』（ミネルヴァ書房, 2004年）

『大学生の時間的展望——構造モデルの心理学的検討』（中央大学出版部, 1999年）

目次

まえがき i

序 章 レポートを楽しんで書くコツ	1
なぜレポート・レジユメを書くのか	2
課題の意味を捉え直す	4
読み手を想像して書く	6
レポートを書くということ	8

第1部 調べる—Input

第1章 知的好奇心をもつ	12
疑問を大切に	12
何事にも興味関心をもつ	14
学問分野にとらわれず貪欲に学ぶ	16
セレンディピティ	18
耳学問	20
メモを取る	22
第2章 批判的なまなざしを養う	26
真理とは何か	26
常識を疑う	28
ウラを取る	31
審美眼を鍛える	33
批判的思考	36
相対化してみる	38
第3章 徹底的に調べる	42
調べることの大切さ	42
調べまくる・集めまくる	44
情報を取捨選択する	46
インプットなくしてアウトプットなし	49
丈夫な野菜づくりは土づくりから始まる	51
ネット検索を活用する	54

第2部 考える——Construct

第4章 コンセプトを明確にする60

頭の中を整理してみる 60 伝えたいことを明確化する 63
概念の定義を大切に 65 セールスポイント 67 タ
イトルに明示する 69 自分の頭で考える 71

第5章 柱立てをつくる75

話の筋立てを考える 75 プロットをつくる 77 プロッ
トをつくったら寝かしておく 79 プロットと材料を見比べ
る 81 具体例を入れる 83 プラニング 86

第6章 論理の一貫性を大事にする89

全体と部分の関係性を意識する 89 論理的なつながりが大
切 91 原因と結果——要因・影響 93 先行研究を頼り
にする 95 論理の飛躍に気をつける 97 レビュー論文
99

第3部 書いて伝える——Output

第7章 厚みのある文章を書く104

丁寧に説明する 104 自分で内容をわかっているか確認し
てみる 106 分厚く書く 108 縦横を意識して書く——
時間軸と空間軸 110 情報を集めて書く 112 推敲しな
がら書く 114

第 8 章 科学の世界の文章作法を知る118

人の文章を盗まない 118 引用と無断借用 120 自分の
感情を挟まない 122 明晰な説明を心がける 124 一文
一義を心がける 126 一段落に一つのことを書く 128

第 9 章 効果的に伝える・見せる131

ワープロに騙されない 131 図表を効果的に使う 133
写真やイラスト 138 体裁を工夫する 139 構成を考え
る 141 アウトライン機能を利用する 143

終 章 書くことの楽しさを身につける147

自分でテーマを見つけて書いてみよう 147 書き終えるま
でのスケジュールを立ててみる 149 書いたレポートをブ
ラッシュアップさせよう 151 レポートを書く頭をつくら
う 153

あとがき 157

索引 159

(イラスト：ひのあゆみ)

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

序章 レポートを楽しんで書くコツ

大学教師になって、30年以上になる。これまでたくさんのレポートを読んできた。レジュメの発表も数多く聞いてきた。そのなかには、面白いものも、つまらないものもあった。いいものも、悪いものもあった。

なかには、どこかの本に書いてあることを、そのまま引き写してきたようなレポートもある。どんなに立派なことが書いてあっても、それはダメなレポートだ。他人の意見をまとめるのは勉強になるかもしれないが、それだけではレポートにはならない。他人の意見と自分の意見を区別する。それがレポートでは大事になる。自分なりの考えがちょっとでも書いてある。そんなレポートは、読みながら興味を惹かれる。伝えたいという思いが溢^{あふ}れているものもある。そういうレポートは、読んでいて楽しいものだ。

4年間の大学時代には、いくつものレポートを書くことになるだろう。同じ時間をかけるのなら、自分でも「やった」と思えるようなものにしてもらいたい。そういうレポートを仕上げてもらいたいものだ。レポートを書くたびに工夫を加える。そうやって、上達していくものだ。大学教師としての私は、そんなふう^{あふ}に思っている。

大学教師生活のなかで、文章を書くときの要領も、それなりにつ

かめてきた。レポート作成には、これが正解というものはない。それでも、ポイントを知っておけば、役に立つはずだ。本書では、その極意をできるかぎりやさしく、誰にでもわかるように伝えてみたいと思う。世の中には、ハウツー本やマニュアル本が溢れている。本書はマニュアル本ではない。いくつかのコツが書かれているだけだ。全部を真似する必要はない。気に入ったところがあれば、ちょっと使ってみてほしい。それでレポートを書くのが楽しくなれば、それに越したことはない。

なぜレポート・レジメを書くのか

イギリスの登山家ジョージ・マロリーは、3度エベレスト登頂に挑んだ。残念ながら、3度目の登頂で遭難してしまった。彼は、生前、「なぜ、あなたはエベレストに登りたいのか」と問われたことがあった。そのとき、「そこに山があるから」と答えたそうだ。マロリーが3度もエベレスト登頂に挑んだのはなぜだろうか。きっと登頂という行為のなかに何らかの楽しみを見出したからだろう。だから死を恐れずに、彼は山頂を目指したのだと思う。75年後に遺体で発見された彼には、それをもはや語ることはできなかったが。

ここで、あなたに問いを出してみよう。「なぜ、あなたはレポートを書くのか」。その問いに対して、あなたはどんなふうに答えるだろうか。

誰にでもすぐ思い浮かぶ答えがある。それは、「先生が課題としてレポートを出したから」というものだ。授業の一環として出されたものだったら、誤りとはいえない答えだろう。でも、これは形式的な答えであって、内容的な答えにはなっていない。

みなさんは、レポート・レジュメという山に登ろうとする。山まどとはいかない、丘かもしれない。それでも、みなさんにとっては大きな課題といえるだろう。みなさんが、その山に登るのはなぜなのか、あらためてそれを問い直すところから始めてみよう。

それでは、もう一度、先ほどの質問を繰り返すことにする。「なぜ、あなたはレポート書くのか」。

それに対して、「単位がほしいから」と答える人もいるかもしれない。これは実に正直な答えだ。大学生にとって、授業の単位は重要な意味をもつ。1単位でも不足していたら卒業できない。レポートを出さなかったら、どうなるだろうか。1年間休まずに出ていた授業の単位がもらえないことになるかもしれない。だったら、どんな内容でもいいから、レポートを出そうと思う。それも一案かもしれない。「時間があまりないから、ネット検索して、とにかくコピーしてレポートを出してしまえ」。そんなふうにしたら、要注意。どこからか、教育的指導の笛が「ピーッ」と鳴りますよ。危ない、危ない。

それでは、「なぜ、あなたはレポートを書くのか」。さらにもう一度、質問を繰り返してみよう。

レポートを書くことは、どういう意味があるのだろうか。その課題を出した先生と真っ正面から向き合う。そこからレポートを書く作業は始まることになる。先生が何を求めているのか考えてみる。その問いの意味を深く考えることが、まず最初に大事なことなのだ。そうしたことについて深く考えずに、とにかく書き始めたりする。そうすると、後で收拾がつかなくなったりするものだ。何事も最初が肝心。

みなさんのなかには、文章を書くことが好きだという人がいるか

もしれない。文章を書くのは苦手という人もいるかもしれない。小学校から高校まで、学校ではさまざまな課題が出されてきたと思う。たとえば、読書感想文や修学旅行に行った報告など、いろいろなことを書く機会があっただろう。そうした文章とレポートやレジュメは、どこがどう違うのだろうか。それについてちょっと考えてみよう。

読書感想文は、本を読んだ後で自分が感じたことを書けば、それでよい。一方、課題図書が出されて、レポートの提出が求められたときはどうだろうか。たとえば、「日本経済の状況について論ぜよ」とか、「エミリー・ブロンテの生き方について、あなたの考えを述べなさい」という課題だったとしよう。「日本経済は厳しい」とか、「ブロンテの生き方はすごい」というような個人的な意見を書いてもダメだ。課題図書に関係する本を少なくとも2、3冊、できれば10冊ぐらいは読んでほしいものだ。もちろん本にかぎらず、論文でもいい。レポートを書く前には、そんな準備が求められるのである。

課題の意味を捉え直す

レポートの課題には、定型的なものがある。「～について論ぜよ」とか、「～について述べよ」というものが多い。では、「論じる」とか「述べる」というのは、どういうことなのだろうか。あまりにも自明のような気がして、わかってしまったように感じるかもしれない。しかし生半可にわかったつもりになっているだけでは、物事はうまく進まない。そんなときには、その言葉について、まず辞書で引いてみるのがよい。

■ 索 引

●あ 行

アイデア 15, 60, 81, 145
アウトプット 51, 52, 60, 72
アウトライン機能 79
厚い記述 111, 112
閾 値 18-20
一義的な解釈 127
一文一義 128, 129
一文の字数制約 128, 129
イラスト 138, 140, 141
因果関係 95
インデックス 48
インプット 50-52, 60-62, 72
インプットなくしてアウトプットなし
49
引 用 123
引用文献 45
ウサギとカモ 13
オムニバスのレポート 76
オリジナリティ 68, 69, 71
終わりは始まり 154, 157

●か 行

概 念 39, 65, 66
科学的知見 32
書く材料 82
学術用語 50
学問的な知識 7
学問の入口 17
学問の神髄 157
課題の意味 4, 6
間接引用 123
感 想 144
起承転結 90, 91
行替え 131
興味関心 14, 15, 20, 24, 149

キーワード 54, 55, 60, 71, 146
空間軸 113, 114
区切り 130
計画性 86
KJ法 60-62, 78
原因と結果 94
語 彙 42
校閲機能 155
講演会 21
構 成 143
誤 植 27
5W1H 124
コピー&ペースト (コピペ) 134
誤 訳 27
コンセプト 63, 70

●さ 行

参考文献 45
時間軸 113, 114
時間配分 87
思考プロセス 36, 37
事実を客観的に伝える 107
辞 書 42
字数制約 129
自分とのかかわり 149
写 真 84, 138, 140, 141
情報の取捨選択 46
情報不足 99
書 式 141
書誌情報 44
審美眼 33, 34, 36, 48
シンポジウム 22
真 理 26-28
『心理学論文の書き方』 145
推 敲 116, 117
推 論 94
数 値 107

スケジュール 87, 151-153
図表 84, 135, 136, 140
精読 35
接続詞 99, 100, 131
セレンディピティ 18
先行研究 96-98, 101, 121-123
前後読み 35, 53
全体と部分 92
相関 95
素材の重要性 83

●た行

大学での学び 157
大学図書館 45
対象 70
タイトル 69, 70, 109
単位 150
短期記憶 23
段落同士の関係 131
段落の区切り 131, 135
知的好奇心 14, 15
直接引用 123
積ん読 36
体裁 141
ディスカッション 21
手書き 133, 145
テクニカルターム 50
データ 85
テーマ 87, 112
テーマを知らない人 112
問いの意味 3
統計資料 85
独自性 68, 71
読書 52, 53
読書感想文 4
図書館 43
途中から読み 35

●な行

内発的動機づけ 149
内包 39
内容 71

苦手意識 156
似たような概念 65, 66
人間の認識 26
ネット検索 43, 54

●は行

俳句 126
バラバラ読み 35, 53
ピア・リーディング 108, 155
鼻行類 31, 32
批判的思考 38
剽窃 64, 120-122
不得意分野 156
プロット 77, 79, 80-82, 86, 87, 92
文献情報 54, 55
文章力 135
方法 70
本の書き手との対話 5
翻訳書 28

●ま行

まとめ 159
見出し 82, 92
見出しの役割 131
耳学問 20, 22
無断借用 121, 122
迷信 28
メタ認知 24, 37, 38, 81, 117
メモを取る 22-24
網羅的な態度 115
目次 143
問題意識 66

●や行

要約 67-69, 109, 143
読んだ論文の数 115

●ら行

乱読 53
理解 115
理論体系 65, 67
レイアウト 142

- レビュー論文 100-102
- レポート
 - の印象 142
 - の核心 63
 - の質 114, 115
 - の筋 77
 - の筋立て 122
 - の全体 117
 - の体裁 142, 143
 - の提出期限 86
 - の深み 113
 - の分量 83, 87
 - の本質 141
- の読み手 8
- の論理 93, 94
- を読み返す 109
- 練習 156, 157
- 論文のセールスポイント 67
- 論理の飛躍 98, 100
- わ行
- ワープロ 133
- ワープロ・ソフト 79
 - のアウトライン機能 146
 - の校閲機能 116

●著者紹介

都筑 学 (つづき まなぶ)

中央大学文学部教授

大学1年生のための伝わるレポートの書き方

How to write a good report

2016年4月20日 初版第1刷発行



著者 都 筑 学
発行者 江 草 貞 治
発行所 株式会社 有 斐 閣

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 3264-1315 [編集]

(03) 3265-6811 [営業]

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・牧製本印刷株式会社

© 2016, Manabu Tsuzuki. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-17420-7

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。